

ハイデルベルク信仰問答より

問 58 「永遠<sup>とこしえ</sup>の命」の項は、あなたにどのような慰めを与えますか。

答え それは、今や私が、永遠の喜びのはじめを心の中におぼえていますので（ローマ 14:17）、この生命が終わった後も、目が未だ見ず、耳が未だ聞かず、人の心が未だ思ったこともない完全な祝福をもち（Iコリント 2:9）、したがって、永久に神をほめたたえる（ヨハネ 17:3）、ということであります。

いよいよ使徒信条を扱う最後の問答となります。「(我は) 永遠のいのちを信ず」と告白するとき、どのような「慰め」があるかと問われています。使徒信条の目指すところはやはり「慰め」（私たちがいつ如何なる時にも依って立つもの）の発見なのです。使徒信条を告白し終わるとき、私たちは毎回「ああ、ここに自分の原点があったんだ」と安堵することができるはずです。

まず「永遠の命」と言うとき、それは時間的な概念を説明しているのではなく、「神の国に属するいのち」のことが言われているという点に注目しましょう。救われた人は、肉の命はそれまでと変わらず持っていますが、同時に真新しい「永遠のいのち」を持つようになったのです。このことは様々な角度から言い直すことができます。

- ・ 霊的に生きる者となった
- ・ 朽ちるものの中に朽ちないものが入り込んだ
- ・ この世には属さないいのちが自分の中に突入してきた
- ・ 神の支配が始まった…等々

つまり、私たちは肉の命においては依然として「この世のもの」であります。この世に属さないいのち」が自分の中で激しく炎のように燃えている存在なのです。福音に生かそうとする力、福音を語らせようとする力が満ち溢れてくる。神の国の生き方が現在に入り込んできている。私たちが永遠の神の国で生きる生活を、この世にもたらそうとしているのです。そうさせているのは神の霊、聖霊であります。

この「永遠のいのち」は、肉体が減びても尚も輝き続け（輝きは増し加わり）、私たちをいつまでも生かし続けるものでありますから、そのようなとてつもない宝を持っている私たちにとって、何物にも代えることのできない「慰め」なのです。

「答え」の中では、「目が未だ見ず、耳が未だ聞かず、人の心が未だ思ったこともない完全な祝福」と、念入りな言い方がされています。この世ではある程度思い描くことができても、実のところほとんど分かっていないほど大きな祝福が与えられる。私たちが今聖書のことばを通して知りうるのは、1%にも満たないのかもしれないかもしれません。しかし、それでも日々、来るべき世でどんな祝福に溢れた生活をしているのかを日々思い巡らすことは、私たちの信

仰生活において重要なことです。私たちはこの世に属しながら、この世に属さないいのちを持っているのですから、「この世のこと」ばかりに目を向けているべきではなく、永遠のことをいつも考えるべきなのです。そして、その永遠がこの世界にどう介入してくるか、神の御業に目を凝らしながら物事を見ていきたい。

永遠の世界での生活が「答え」の最後に書かれています。「永久に神をほめたたえる」とあるように、そこでは御使いの大合唱とともにおびただしい聖徒の群が一堂に会して賛美をしているというのです。これはヨハネの黙示録に描かれた光景でもあります。

この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があった。それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。「私たちの主、また神よ、あなたこそ栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」（黙示録4:8-11）

永遠の神の国では、神が創造された美しい世界が完全に回復しており、聖徒たちはその世界を何の苦しみもなく、完全に神の御心に沿った状態で、適切に管理していることでしょう。そして、何をするにも賛美が口から溢れ出てくるのです。もし私たちが現在の生活の中で賛美がほとぼり出てきてやまないなら、来るべき世の先取りが始まっているのかもしれない。

今年の3月末から4月初頭にかけて、香川県にある妻の実家に家族で帰省する機会をいただきました。そのときに、山の中にある叔母の家に泊まらせてもらいましたが、本当に何もない所で、まさに東京でのあくせくした生活から分離された時間を過ごすことができました。その滞在中のある晩、私は不思議な夢を見ました。自分がおびただしい人々と共に集まっており、讃美歌529番「あうれし、わが身も」を大声で歌っているのです。「歌わでやあるべき、救われし身の幸、讃えでやあるべき、御救いの畏こさ!」。この夢の意味するところは分かりませんが、天国の光景を垣間見ることが時々許されているように感じます。同じ主を信じる皆様にも、賛美をするごとに、聖徒が共に集まるごとに、ご自分が天に属する者であることを確認／確信していただきたいと願っています。